第5章

エビデンスの質の高さと社会における利用

柳本武美　yanagmt@ism.ac.jp　統計科学専攻／統計数理研究所

5.1　目標

科学的な知見と社会に役立たさせるために必要である、エビデンス（証拠・根拠）の質（信頼度）の高さと市民社会が求める方策を考え、そして討論する場として表記の会合をもった。

私がこの問題を考えるときに参考にする議論は、品質管理の世界では既に決着済みである。工業製品は「良い品を安く」すべての消費者に渡すことだと単純に考えられることがある。しかし今日では、「求められる品質を製造工程で作り込む」ことを目標にする。製品の良し悪しが明瞭なときには単純な考え方で充分である。ところが、製品設計者が考える機能が消費者が求め

表 1:

「エビデンスの質の高さ」
vs
「社会で求められるエビデンス」
← 求められる品質を効率良く

「質の高い情報と低い情報」
vs
「情報の質の高さの程度」
← 情報の質を作り込む

表 2:

安全性とリスク管理
エビデンスの質の高さと求められるエビデンス
社会への広報(アナウンス)
すべての情報
すべてのある程度質の高い情報
責任が負える人が認めた情報
社会が良い方向に向かう情報
← 問題は単純ではない

るものでないミスマッチは頻発している。また品質は製造工程で作り込まれるのであって、製造工程は目標に適うものが求められる。

食品・医薬品の安全性とか災害への対処のような、安全性とリスク管理に議論を絞っても、行政と科学者と対応の現状は、真に単純志向そのものであった。役所の担当部署が関連していそうな基礎科学者と協議にて対応を決めていた。市民社会が求める対応は、専ら政治問題と見なされ、また基礎科学者とは本来専門外の事項でも引き受けて、求められるエビデンスを作り出す努力は等閑視されていた。基礎科学者とは、価値・目標を定めない自然の真理と認識する研究のスペシャリストである。市民社会の求める質の高いエビデンスを生みだす専門家とは、価値・目標を明確にすると共に、結果の検証をする設計科学のスペシャリストである。表 1 と 2 はワークショップの際に使用した OHP 原稿である。

5.2 プログラム

ワークショップは一部と二部に分けて、一部は求められる方策を考えるためにリスク論とリスクコミュニケーションについて講演と討論を行なった。

表 3:

プログラム

第一部 総論(社会学・哲学から) 13:30〜16:00
1)平川 秀幸(京都女子大学) 75分
「「予防的アプローチ」のリスク論:社会学的な観点から」
2)宮川 豊子(慶應義塾大学) 75分
「リスク・コミュニケーションとはどのような考え方か」

休憩 (16:00〜16:15)

第二部 各論(医療分野から) 16:15〜19:15
1)林 邦彦(群馬大学) 60分
「大規模女性コホート研究の目的とデザイン」
2)津田 敏秀(岡山大学) 60分
「医学における因果関係とその利用」
3)津谷 喜一郎(東京大学) 60分
「伝えたいことと知りたいこと - TCAMの場合 -」

その内容は本報告に掲載される。二部は保健学と医学の専門家に講演をお願いした。林氏は良いエビデンスを得るためには、計画の下に研究チームが必要であることを話された。津田氏は実験室に考えているような硬直した因果推論では公衆衛生の問題が把握できないことを強調された。津谷氏からは保健情報の広報についての話題を提供して頂いた。いずれの講演に対しても活発な討論がなされた。

ワークショップの企画には、林衛氏にお世話になった。企画の視野が広くなったのは同氏のお陰である。また当日及び事前の事務は土田純子さんに手際よくこなして頂いた。なお一点付言をすると、会合の案内は行動計量学会のニューズレターに掲載されたことである。特に頼んだ訳でもなく、大変に有り難いことであった。